

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320130

研究課題名(和文) 近世における前期国学の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of the previous fiscal year study of Japanese classical literature in the early modern period

研究代表者

根岸 茂夫 (NEGISHI, Shigeo)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：30208285

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,900,000円、(間接経費) 2,970,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、荷田春満に代表される前期国学の形成を解明し、文化・政治に与えた影響を検討して近世社会の展開に位置付けた。春満の生家に伝来した「東羽倉家文書」の悉皆調査を通じて、春満晩年の江戸を中心に1100人に及ぶ関係者を検出し、文化・宗教・政治に及ぶ多様な人的ネットワークを見出し前期国学の広がりや影響を検証した。また春満と門人の和歌を集大成して国学の展開を分析し、元禄・享保期の諸問題を神道史・法制史・書誌学などの検討を加え学際的・総合的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study has clarified the development of the early Kokugaku, in which Kadano Asumamaro played a vital role, analyzed its impact on culture and politics, and evaluated it in the developing of early modern Japanese society. In particular, this study has been achieved by the following two surveys. One was the complete enumeration of Higashihakura family documents, in which family Azumamaro had been born and the documents has been transmitted to. The survey revealed Azumamaro's 1100 associates in his later years, mainly in Edo. It also illuminated that his human networks covered cultural, religious and political fields, and how it affected to expand the early Kokugaku. The other was the compilation of all Waka poems of Azumamaro and his disciples, which elucidated how Kokugaku had developed. With the viewpoints of Shinto history, legal history and bibliography, this interdisciplinary research enabled to solve several issues around Genroku-Kyohou period comprehensively.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：国学 荷田春満 歴史学 文学 神道学

1. 研究開始当初の背景

(1) 国学の四大人の鼻祖と称される春満の関係史料は、大部分が未公開であったため、賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤などと比較して未解明の部分が多く、春満を中心とする前期国学の研究は未開拓の分野として空洞化していた。三宅清『荷田春満の古典学』が唯一のまとまった研究成果であったが、三宅による春満の学問に対する評価はテキスト類を分析するのみで、東羽倉家文書の分析には及ばず、近世社会における位置づけが考慮されていなかった。政治・経済面も含んだ国学の社会的諸影響に関しては、戦前から伊東多三郎「草莽の国学」研究という先駆的業績があり、戦後では民衆史的視点を導入した芳賀登から、宮地正人・遠藤潤などによる平田国学の研究が、平田家文書や信濃の平田国学の史料の整理・調査のなかで進展し、国学研究の従来の枠組やイメージは大きく変化させた。一方で、中核となるべき国学分野の研究は、幕末維新时期の平田篤胤没後の門人層に集中しており、荷田春満ら 18 世紀の前期国学への研究は立ち遅れていた。

(2) 研究代表者を中心とした研究グループが全国各地の図書館・博物館・資料館等に散逸した荷田春満関連史料を撮影・複写していた。同時に、戦後から非公開となっていた東羽倉家文書(東羽倉家は春満の生家。近世には伏見稻荷社の御殿預を世襲して荷田氏・羽倉家を称す。伏見稻荷社の目代を世襲した西羽倉家に対していう)を所蔵している京都市伏見区東丸神社に対し、研究グループが悉皆調査等を神社側に打診。東丸神社松村準二宮司御夫妻からの承諾を経て、東羽倉家所蔵史料の全容を解明する契機を得る。これに基づき、平成 15 年～18 年度実施の「近世国学の展開と荷田春満の史料的研究」(課題番号 15320086)を申請し、文書の悉皆調査および目録化に着手した。一方、春満の著述類については、平成 13 年度から國學院大學が百二十周年事業の一環として編纂事業を開始し『新編荷田春満全集』(おうふう刊)が平成 21 年度に全 12 巻の刊行を完了させた。その過程で伏見稻荷大社中村陽宮司はじめ職員の方々の高配を得て、資料調査の幅が質量ともに拡充した。平成 22 年度からの本科研は、このような研究基盤の着実な整備と研究成果を踏まえたものである。

(3) 本科研申請以前に、従来の春満の評価と学問的位置付けは再検討を要することが明らかとなったため、おもに上記(2)の事業に参加した多分野の研究者が、多角度から春満の学問に検討を加え、論文を『國學院雑誌』国学特集号(平成 18 年 11 月)に掲載した。さらに松本久史は『荷田春満の国学と神道史』(平成 17 年、弘文堂)を刊行し、18 世紀を中心に学芸史・神社史・地域史にまたがる多領域で春満の学問の影響があったことを論じた。

さらに、平成 19 年度から 21 年度にかけては「國學院大學特別推進研究助成金」及び「文学部共同研究費」の大学経費による研究を継続。テキスト類の分析による学術・思想面と、文書の分析による社会実践面の解明を同時に行うことにより、春満をはじめとする前期国学の史的意義を究明できるという中間の見通しと今後の課題を明らかにしてきた。このような研究成果を挙げ、かつ東丸神社所蔵史料に精通する研究者を選び、後進の育成も鑑みたうえで、本科研の研究分担者・連携研究者・研究協力者として協力を仰いだ。

(4) 現段階では、春満の門人達の史料について解読と分析は着手しつつも、中世末から近代に到る東羽倉家の史料の大半を占める神社組織・財政、朝廷・神祇伯家、幕府に対する史料の調査の多くはまだ未着手である。また、寛文期から明治期に至る歴代当主の日記の解読と考察については、その一端を明らかにすることにどまる。加えて、同家史料は、特に公的機関等による保存のための支援措置がなされておらず、史料調査および保存作業は、我々の出張調査時を除いて、所蔵者の厚意に依存して進められている。このような諸事情を考慮し、詳細な学術的分析および整理・保存作業が急務な状況にあると考え、平成 22 年度からの基盤研究(B)(一般)に「近世における前期国学の総合的研究」という題目で申請を行うこととし、これが採用され科学研究費による補助を受けることとなった。

2. 研究の目的

本研究は、荷田春満(1669-1736)に代表される「前期国学」が、近世学問の形成に果たした役割や位置づけのみならず、近世の文化や社会・政治にも大きな影響を与えていたことを、学際的・総合的に検討を加えて明らかにする。これまでの史料調査により、国学の四大人の筆頭にあげられる荷田春満が、総合的な学問体系を構想していたこと、八代將軍徳川吉宗の文教政策に協力して古書や漢籍の調査蒐集に当たり、律令の研究を命じられていたこと、歴史的に武家政権を批判する思想をもっていた、などが解明されてきた。これらの事実は今まで知られることのなかった事柄であり、春満が、本居宣長以降とは異なり、和漢の総合的な学問の中で日本の歴史・文化・伝統を追求しようとした「総合的人文学」ともいべき学問を目指していたことを示している。本研究の目的は、東羽倉家文書全体の史料学的な検討を基盤として、春満の学問の検証・解析とその周囲および社会的・文化的な背景を併せて考察を進め、わが国における総合的人文学の萌芽を 17 世紀後期から 18 世紀の近世前期国学の中に探求することにある。

3. 研究の方法

(1) 東羽倉家文書(現在確認できたもの 7443

点)を整理、目録化した。史料の目録化に際しては、史料全体の性質を鑑み、「A 荷田春満関係史料」(春満自筆の書状・草稿・詠草・祝詞類および親族子弟の書状・詠草類)・「B 羽倉家関係史料」(羽倉家の系図・系譜類)・「C 社家・社務」(縁起・日記等)・「D 学芸」(荷田一門の書状・詠草類)・「E 書籍・刷物」(神書・国学・漢籍・仏典・和書・近代印刷物等)以上の5分類を区分した。5分類の下にさらに細目を立て、原則として編年に分類し、東丸神社所蔵である東羽倉家文書の伝来のあり方、史料の概要と特徴を見出せる分類を試みた。一点ずつ中性紙の封筒に入れたうえで、原則として分類番号順に桐製の箱に収納した。

(2)7400点余に及ぶこれらの史料を、現地調査によって一点ずつ確認・目録化しながら、併せて内容を項目ごとに精査した。その結果、東羽倉家の史料は、春満を中心として羽倉(荷田)家関係、稻荷社内関係、朝廷・幕府・地域社会との関係という同心円状の構造を構成していることを解明した。

(3)(2)を受け、前期国学が成立し発展を遂げる17世紀後半から18世紀中葉までの近世社会のなかで、文化・政治・社会に大きく影響を与えながら展開し社会に定着しながら、次の時代の国学発展の基盤を形成していく様相を、次の2つの課題を設定して考察した。「春満の学問が時間・空間的に広がっていく過程の解明」：春満の著述類の内容分析を進め、神道、文学、歴史、法制、さらに近世人文学史上の学術的位置付けを行う。分析・検討は以下の3つの観点から行う。第一、門人関係史料を分類・整理し、春満の学術の伝播・継承・発展過程を検証する。第二、元禄・享保期における儒学など諸学問との関係および幕府の文教政策と春満との関わりを通し、前期国学が形成された要因を検討する。第三、春満没後の影響について、江戸および京都の両面から人的・学的交流を検討・比較する。「春満の生家である東羽倉家、および稻荷社を中心とした社会関係の解明」：羽倉家の家系・出自等の言説、祖先祭祀を中心に当時の社会との関係を解明する。分析・検討は以下の5つの関係性を考慮して行う。第一、稻荷社内の社家組織、荷田氏系と秦氏系社家との関係。第二、稻荷社家と「本願」寺院の愛染寺との関係。第三、朝廷・白川神祇伯家・幕府との関係。第四、門前・社領を通じた地域社会との関係。第五、全国の稻荷信仰との関係。

以上を総合的に検証・考察し、いまだ解明されているとはいえない前期国学の実態を明らかにすることで学問史上における意義を解明し、近世社会・文化の発展のなかに位置づける。

4. 研究成果

(1)東羽倉家文書の悉皆調査による原本確認および再検討を中心とし、史料的な性格を精査した。また、周辺調査として高知県山内家宝物資料館所蔵の谷垣守関係資料を調査し、比較検討を行った。

(2)平成13年の調査以来に行われていた東羽倉家文書の目録化作業を推し進めた。その結果、東羽倉家文書は伏見稻荷の御殿預であった東羽倉家が社務を遂行しながら作成・保管してきた「C社家・社務関係史料」がまず形成され、17世紀中葉から次第に体系化していったこと。Cの体系化とともに、東羽倉家の「家」も整えられ、「B羽倉家関係史料」も形成されたことが判明した。

(3)(2)におけるCの体系化とBの形成が、荷田春満の実父羽倉信詮(1642-96)の時代から整えられており、この事実は、伏見稻荷社の構造と社家組織、朝廷・幕府との関係や近世的な信仰の広がりと同時に、この時代に春満が学問を形成していく視点とも絡めて史料群の性格を考察する必要があるという、新たな課題を明確にした。

(4)C・Bに続き、17世紀末から18世紀前期にかけて春満の学問が近世社会に浸透する過程で、「A荷田春満関係史料」が形成される。Aは後世に収集されたものも存する。その一方で、家史料としての性格をもつ親族や門人の書状や、戦前における『荷田全集』編纂事業などで収集されて保存されたと思しき書簡史料、同時に、春満実弟であり家職である御殿預を継承した羽倉信名(1685-1751)の割記・日記類からは、春満が在世中に形成した広汎に亘る人的ネットワークの様相や、春満が稻荷社中で尊敬を集めカリスマ化していく過程、さらに社内の愛染寺をめぐる社中紛争と出訴、幕府による裁定の過程などが判明し、近世中期におけるさまざまな社会矛盾と稻荷社中との関係が見いだせた。

(5)春満没後の18世紀中葉以後、東羽倉家文書は、C・Bが一層整備体系化された。同時に、18世紀後半に御殿預として活躍した信郷(信名養子)が、上田秋成・小沢蘆庵など上方文人とのネットワークを形成し、東羽倉家文書のうちに、「D学芸関係史料」が形成されるようになる。近世後期に春満の検証や伝説化がなされ、春満の学統とどう関わるかという問題は、連携研究者の一戸渉が荷田信郷に焦点を当てて解明に取り組み、その先駆的な研究を『上田秋成とその時代』を上梓することで成果とした。

(6)以上、史料検討と体系化を研究基盤の成果を導き、さらに「3. 研究の方法」(3)に明示した2つの課題に従い、以下の成果を挙げた。享保期の幕府の文教政策と春満の歴

史学との関連で検討を進め、その成果の一端が、國學院大學創立百三十周年記念として國學院大學博物館において開催された「国学の始祖 荷田春満」展の展示および同展図録『国学の始祖 荷田春満』に反映された。連携研究者の高塩博・研究協力者の宮部香織が春満の律令学から、連携研究者の松本久史が門人大西親盛についてから、論文として発表。渡邊卓は『『日本書紀』受容史研究 国学における方法』(笠間書院 平成 24 年)を刊行した。これによって従来文学・日本語学・思想史・神道史からの見地で研究された前期国学の分野は、より深長なレベルにおける和漢の知的体系を背景とし、かつ当時の政治・法制とも密接に関係した「総合的人文学」の視点からの研究が不可欠であることを提起した。研究分担者の白石愛を中心とした研究協力者らの手によって、荷田信名の江戸滞在中に書かれた日記類から 1100 人に及ぶ春満の門人・関係者を抽出してその人物像を明らかにした。さらに、春満が生前に築いた人脈を、春満没後も信名が積極的に利用していたことなどが判明した。今後、このネットワーク解明が主軸となり、荷田学および前期国学の諸相を解明することになることを確認した。研究協力者の石岡康子が、春満の年譜を作成し、春満娘の直子はじめ親族の女性の手紙を翻刻・検討した。これにより、信名が関わった江戸における伏見稲荷の訴訟関連の背景や過程が明瞭となり、かつ近世期の訴訟関係の研究分野に新たな資料と考察の見地を投じた。連携研究者の鈴木淳・一戸渉、研究協力者の中村正明・早乙女牧人が春満と門人の歌会記録・和歌を現地調査で撮影・整理し、翻刻・目録化を行った。また、新出の和歌資料 12 点を集大成した。加えて『新編荷田春満全集』七巻(おうふう、平成 19 年)所収『伊勢物語童子問草稿』の遺漏を補うべく、春満自筆草稿断簡 2 点も翻刻した。これらから、春満による和歌指導の実態解明はもちろん、和歌を通じて形成された人的ネットワークの様相や門人の存在形態を明らかにした。研究協力者の宮部香織が、東羽倉家文書の書籍調査の中で蔵書印の考察を行い、史料学的かつ書誌学的研究も進めた。研究参加者総体で、荷田家と伏見稲荷の年中行事の記録『秘記』を翻刻・検討し、稲荷社の社家としての荷田家の位置を考察し、その信仰圏と京坂地域の問題、荷田家と諸大名との関係などを明らかにした。さらにこれらについては、代表者の根岸茂夫は稲荷社と境内の宗門人別帳から組織や家族構成・境内の景観などから、松本久史は享保期の伏見稲荷の社家組織から、より深めた検討に着手した。また、研究協力者の竹田真依子・番場夏希が、元禄享保期における稲荷社の狐と境内の環境問題について史料を検討した。研究協力者の岩橋清美が稲荷社の背後の稲荷山の検討から稲荷社と稲荷村の関係、稲荷社が幕府に献上した松茸をめぐる儀礼や稲荷社・村の

負担、また稲荷山の環境の変化などについても考察した。

(7) 上記(6)における翻刻・研究の成果の一端を、『東羽倉家文書史料集一』(根岸茂夫編 國學院大學、平成 25 年 11 月)および、本科研研究成果報告書『近世における前期国学の総合的研究』(國學院大學文学部、平成 26 年 3 月)として上梓した。

(8) 平成 15 年度科研に開設したホームページ(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/kada/>)の成果を踏襲し、平成 22 年度科研においても積極的に継続活用し、ホームページ(<http://www.azumamaro-kokugaku.jp/index.htm>)として研究成果を公開した。國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所「「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築」事業が主催する公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」へ共催し、研究代表者の根岸茂夫、研究分担者の白石愛、連携研究者の松本久史・一戸渉の 4 名が発表を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 32 件)

一戸 渉, 早乙女 牧人, 中村 正明, 荷田春満和歌関係資料集、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.77-136、2014、査読無

石岡 康子, 享保二十年稲荷社司寺社奉行所出訴一件、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.143-166、2014、査読無

岩橋 清美, 寛文期稲荷山における山林管理と松茸採取について、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.167-178、2014、査読無

白石 愛, 荷田信名『在府日記』人名一覽、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.21-66、2014、査読無

宮部 香織, 東丸神社所蔵史料にみる印譜集、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.67-76、2014、査読無

宮部 香織, 東丸神社所蔵の延喜式関連史料について、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.137-142、2014、査読無

竹田 真依子, 番場 夏希, 元禄・享保期の伏見稲荷社をめぐる狐と犬、『近世における前期国学の総合的研究』, pp.179-184、2014、査読無

石岡 康子, 荷田直子・いし・左仲書状集、『東羽倉家文書史料集一』, pp.17-43、2013、査読無

石岡 康子, 元文三年 羽倉信名江戸在府日記、『東羽倉家文書史料集一』, pp.83-118、2013、査読無

川村 由紀子, 近世中期における江戸の「町棟梁」、『日本歴史』, 786 号, pp.36-53、2013、

査読有

白石 愛、元文元年 羽倉信名江戸在府日記、
『東羽倉家文書史料集一』、pp.45-82、2013、
査読無

根岸 茂夫、東丸遺墨、『東羽倉家文書史料
集一』、pp.5-15、2013、査読無

根岸 茂夫、元治元年 秘記、『東羽倉家文
書史料集一』、pp.119-173、2013、査読無

高塩 博、「公事方御定書」の元文三年草案
について 「元文三年御帳」の伝本紹介
、『國學院法學』52 卷 2 号、pp.27-167、
2013、査読有

一戸 涉、橋本経亮の歌文資料 『丁巳
詠草』解題と翻印 、『上方文藝研究』、
第 10 号、pp.55-71、2013 年、査読有

松本 久史、篠崎東海と荷田春満 和学を
めぐる一考察、『國學院雑誌』、第 114 卷第
4 号、pp.1-13、2013、査読有

中村 正明、恋川春町の狂文、『國學院雑誌』、
第 113 卷第 12 号、pp.29-44、2012、査読
有

高塩 博、丹後国田辺藩の「徒罪」につい
て、『國學院法學』、49 卷 4 号、pp.1-44、
2012、査読有

渡邊 卓、国学者の業績展示と社会的意義
昭和初期における荷田春満遺墨展を中
心に 、『國學院大學博物館學紀要』、第 36
輯、pp.13-20、2012、査読有

渡邊 卓、国学者の業績展示と社会的意義
昭和初期における荷田春満遺墨展を中
心に 、『國學院大學博物館學紀要』、第 36
輯、pp.13-20、2012、査読有

⑳一戸 涉、羽倉風のゆくえ、『朱』、第 55 号、
pp.16-35、2011、査読無

㉑根岸 茂夫、仙台藩の行列と軍役、『仙臺郷
土研究』、通巻 283、全 17p、2011、査読無

㉒高塩 博、丹後国田辺藩の博奕規定と「徒
罪」、『國學院法學』、49 卷 2 号、pp.1-52、
2011、査読有

㉓根岸 茂夫、真田家の大名行列、『大名の旅
松代藩の参勤交代』、pp.107-113、2011、
査読有

㉔渡邊 卓、清原宣賢「日本書紀抄」の注釈
法と伝播 諸本の比較を通して、『神道宗
教』、第 222・223 号、pp.73-97、2011、査
読有

㉕一戸 涉、「自像笥記」異文 秋成と自伝
、『上方文藝研究』、第 8 号、pp.73-81、
2011、査読有

㉖高塩 博、「公事方御定書」の編纂過程と「元
文五年草案」について、『國學院法學』、第
48 卷第 4 号、pp.19-125、2011、査読有

㉗宮部 香織、井上頼因述「神祇令講義」と
田邊勝哉講述『神祇令義解講義』について、
『國學院大學紀要』、49 卷、pp.109-130、
2011、査読有

㉘一戸 涉、橋本経亮の蒐集活動 『香果
遺珍』研究序説 、『近世文藝』、第 93
号、pp.14-29、2011、査読有

㉙白石 愛、「荷田春満『和書真偽考』の再検

討』、『國學院雑誌』、第 112 卷第 1 号、
pp.50-67、2011、査読有

㉚渡邊 卓、橘守部手沢本『先代旧事本紀』
と『旧事紀直日』、『國學院雑誌』、第 112
卷第 4 号、pp.15-28、2010、査読有

㉛根岸 茂夫、史料整理の技法、『古文書の語
る地方史』、pp.193-219、2010、査読無

〔学会発表〕(計 10 件)

一戸 涉、和歌史上における荷田春満の位
置、公開学術研究集会、國學院大學(東京
都渋谷区)、2014 年 2 月 8 日

白石 愛、江戸における荷田家のネットワ
ーク 荷田信名『在府日記』を中心に、
公開学術研究集会、國學院大學(東京都渋
谷区)、2014 年 2 月 8 日

根岸 茂夫、「近世における前期国学の総合
的研究」研究事業の概要、公開学術研究集
会、國學院大學(東京都渋谷区)、2014 年 2
月 8 日

松本 久史、荷田派の祝詞研究 稻荷祠官
大西親盛を例にして、公開学術研究集会、
國學院大學(東京都渋谷区)、2014 年 2 月 8
日

渡邊 卓、『釈日本紀』所引『丹後国風土記』
逸文の性格、風土記研究会、同志社女子大
学(京都府京都市)、2013 年 9 月 1 日

渡邊 卓、『釈日本紀』にみる『古事記』の
価値、古事記学会、奈良県新公会堂(奈良
県奈良市)、2013 年 6 月 1 日

宮部 香織、いわゆる「異質令集解」につ
いての再検討、法制史学会東京部会、法政
大学(東京都千代田区)、2012 年 12 月 15 日

中村 正明、恋川春町の狂歌と狂文、國學
院大學國文學會秋季大会、國學院大學(東
京都渋谷区)、2012 年 11 月 18 日

渡邊 卓、橘守部の『先代旧事本紀』研究
『旧事紀直日』の本文校訂を中心として
、國學院大學國文學會、國學院大學(東
京都渋谷区)、2010 年 10 月 9 日

白石 愛、荷田春満『和書真偽考』の再検
討、東京大学近世史研究会、文京区立湯島
会館(東京都文京区)、2010 年 5 月 9 日

〔図書〕(計 12 件)

根岸 茂夫、『近世における前期国学の総合
的研究』、國學院大學、186p、2014

根岸 茂夫、『東羽倉家文書史料集一』、國
學院大學、178p、2013

鈴木 淳、加藤 弓枝、和歌文学大系 70 『六
帖詠草・六帖詠草拾遺』、明治書院、531p、
2013

高塩 博、『近世刑罰制度論考 社会復帰を
めざす自由刑』、成文堂、350p、2013

松本 久史、『古事記と国学』、東京都神社
庁、57p、2013

根岸 茂夫、松本 久史、堀口 裕美子、『国学
の始祖 荷田春満』、國學院大學、136p、2012
岩橋 清美、松尾 正人、『多摩の近世・近代
史』、中央大学出版部、293p(pp.3-24)、2012

渡邊 卓、『『日本書紀』受容史研究 国学における方法』、笠間書院、274p、2012
一戸 渉、『上田秋成の時代 上方和学研究』、ペリかん社、471p、2012
根岸 茂夫、大友 一雄、佐藤 孝之、末岡 照啓、『近世の環境と開発』、思文閣出版、362p (pp.3-26)、2010
岩橋 清美、『近世日本の歴史意識と情報空間』、名著出版、369p、2010
根岸 茂夫、佐藤 孝之、『古文書の語る地方史』、吉川弘文館、222p (pp.194-219)、2010

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)
なし

取得状況 (計 0 件)
なし

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.azumamaro-kokugaku.jp/index.htm>

6. 研究組織

(1)研究代表者
根岸 茂夫(NEGISHI, Shigeo)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：3 0 2 0 8 2 8 5

(2)研究分担者
古相 正美(FURUSO, Masami)
中村学園大学・教育学部・教授
研究者番号：3 0 2 6 8 9 6 6

白石 愛(SHIRAIISHI, Ai)
東京大学・総合研究博物館ミュージアム・テクノロジー研究部門・特任助教
研究者番号：6 0 4 3 1 8 3 9

(3)連携研究者
鈴木 淳(SUZUKI, Jun)
元・国文学研究資料館・名誉教授
研究者番号：4 0 1 6 2 9 5 3

高塩 博(TAKASHIO, Hiroshi)
國學院大學・法学部・教授
研究者番号：4 0 2 3 6 2 1 1

松本 久史(MATUMOTO, Hisashi)
國學院大學・神道文化学部・准教授
研究者番号：2 0 3 6 5 5 1 3

一戸 渉(ICHINOHE, Wataru)
慶應義塾大学・附属研究所神道文庫・准教授
研究者番号：2 0 5 9 7 7 3 6

渡邊 卓(WATANABE, Takashi)

國學院大學・研究開発推進機構・助教
研究者番号：1 0 7 2 6 0 1 1

(4)研究協力者
榎本 博(ENOMOTO, Hiroshi)
春日部市郷土資料館・学芸員

堀口 裕美子(HORIGUCHI, Yumiko)
國學院大學・学術メディアセンター事務部図書館事務課(神道文化学部資料室)・事務員

岩橋 清美(IWAHASHI, Kiyomi)
國學院大學・文学部・兼任講師

早乙女 牧人(SAOTOME, Makito)
東海大学・文学部・非常勤講師

中村 正明(NAKAMURA, Masaaki)
國學院大學・文学部・兼任講師

舟木 勇治(FUNAKI, Yuji)
國學院大學・文学部・兼任講師

宮部 香織(MIYABE, Kaori)
國學院大學・研究開発推進機構・客員研究員

石岡 康子(ISHIOKA, Yasuko)
國學院大學・聴講生(研究補助員)

川村 由紀子(KAWAMURA, Yukiko)
國學院大學・大学院文学研究科・史学専攻・博士課程後期大学院生

田中 丈敏(TANAKA, Taketoshi)
國學院大學・大学院文学研究科・史学専攻・博士課程後期大学院生

太田 和子(OTA, Kazuko)
國學院大學・大学院文学研究科・史学専攻・博士課程後期大学院生

岡谷 成康(OKAYA, Nariyasu)
國學院大學・大学院文学研究科・史学専攻・博士課程後期大学院生

竹田 真依子(TAKEDA, Maiko)
國學院大學・大学院文学研究科・史学専攻・博士課程前期大学院生

番場 夏希(BANBA, Natuki)
國學院大學・大学院文学研究科・史学専攻・博士課程前期大学院生